

石台 II 遺跡

(都) 東津田中央線事業に伴う発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　言

1. 本書は、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成19年度・20年度に実施した（都）東津田中央線事業に伴う石台II遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査組織は下記のとおりである。

(平成19年度)

依頼者 島根県松江県土整備事務所

主体者	松江市教育委員会	教　育　長	福島　律子
"		理　事	友森　勉
"	文化財課	課　長	吉岡　弘行
		係　長	飯塚　康行
		主　任	後藤　哲男

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

	理　事　長	松浦　正敬
	専　務　理　事	中島　秀夫
	事　務　局　長	松浦　克司
"	埋蔵文化財課　課　長	廣江　眞二
	課　長　補　佐	錦織　慶樹
	調　査　員	江川　幸子（調査担当者）
	調査補助員	山根　英之

(平成20年度)

依頼者 島根県松江県土整備事務所

主体者	松江市教育委員会	教　育　長	福島　律子
"		理　事	友森　勉
"	文化財課	課　長	吉岡　弘行
		係　長	飯塚　康行
		主　任	後藤　哲男

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

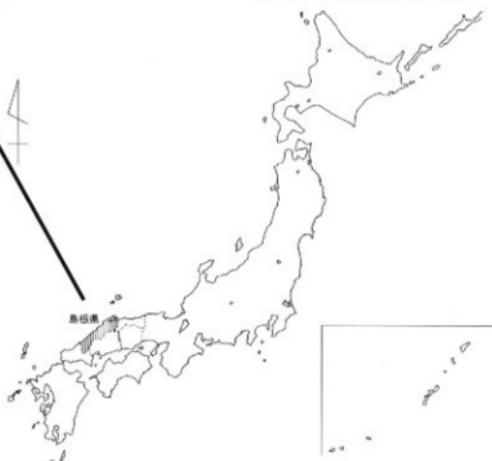
	理　事　長	松浦　正敬
	専　務　理　事	中島　秀夫（平成20年10月15日まで）
	事　務　局　長	松浦　克司
"	埋蔵文化財課　課　長	廣江　眞二
	課　長　補　佐	錦織　慶樹
	調　査　員	石川　崇（調査担当者）
	調査補助員	大西　總司

3. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の多大なご指導、ご教示、ご協力をいた
だいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
- 酒井 哲弥(国立大学法人島根大学総合理工学部地球資源学科准教授) 池淵 俊一(島根県教
育庁文化財課) 東森 晋(同) 稲田 陽介(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)
渡辺 正巳(文化財調査コンサルタント株式会社) 日発工業株式会社 地元自治会の方々
4. 本書中の挿図中の方位は磁北、レベルは海拔高である。
5. 本書の作成には主に以下の者が携わった。
- [遺物の実測] 山根英之、田中 和美、石川 崇
[遺構・遺物の浄書] 大西 総司、石川 崇
[写真撮影] 江川 幸子、石川 崇
[執筆・編集] 石川 崇
6. 本書掲載の出土遺物に関して、土器・石器は1/3(石鎚は1/1)、木製品は1/5で掲載している。
7. 本遺跡内の土壤分析に関しては、文化財調査コンサルタント株式会社に依頼し、これをおこなっ
た。
8. 出土遺物・実測図・写真等は松江市教育委員会で保管している。



第1図 松江市位置図（上）

第2図 島根県位置図（下）



目 次

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過	2
第1節 調査に至る経緯	2
第2節 発掘調査の経過	2
第2章 遺跡の位置的・歴史的環境	4
第3章 調査成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 調査1区	7
第3節 調査2区	10
第4章 石台II遺跡発掘調査に伴う花粉分析	17
第5章 まとめ	21

挿図図版目次

第1図 松江市位置図	例言	第10図 淡褐色粘質土層～粗砂層 出土遺物実測図	9
第2図 島根県位置図	何言	第11図 2区 土層断面図	10
第3図 試掘トレンド位置図	3	第12図 上層遺物包含層 出土遺物実測図	11
第4図 周辺の遺跡位置図	5	第13図 下層遺物包含層 出土遺物実測図（1）	12
第5図 調査区位置図	6	第14図 下層遺物包含層 出土遺物実測図（2）	13
第6図 1区 土層断面図	7	第15図 下層遺物包含層 出土遺物実測図（3）	14
第7図 灰褐色粘質土層～黒色粘質土層 出土遺物実測図	8	第16図 下層遺物包含層 出土遺物実測図（4）	15
第8図 淡灰色粘質土層 出土遺物実測図（1）	8	第17図 遺物包含層 出土遺物実測図	16
第9図 淡灰色粘質土層 出土遺物実測図（2）	8	第18図 花粉ダイアグラム	17

写真図版目次

図版1 調査前全景（1区周辺）	淡褐色土層～粗砂層 出土遺物
調査前全景（2区周辺）	
図版2 1区 調査状況	図版6 2区 下層遺物包含層 出土遺物 繩文土器
1区 完掘状況と土層断面	図版7 2区 下層遺物包含層 出土遺物 弥生土器（1）
図版3 2区 調査状況	図版8 2区 下層遺物包含層 出土遺物 弥生土器（2）
2区 遺物出土状況	図版9 2区 上層遺物包含層 出土遺物 弥生土器
図版4 2区 完掘状況	下層遺物包含層 出土遺物 弥生土器（3）
2区 土層断面	上層遺物包含層 出土遺物 木製品
図版5 1区 灰褐色粘質土層 出土遺物	下層遺物包含層 出土遺物 木製品
淡褐色粘質土層 出土遺物	

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

石台Ⅱ遺跡は島根県高規格道路事務所により松江第五大橋道路が計画され、また、松江市都市計画課が松江第五大橋道路の機能を補完する目的を持つ都市計画道路（都）東津田中央線を計画したことにより、松江市教育委員会が行なった試掘調査により平成18年度に発見された遺跡である。なお、松江第五大橋道路については橋南区域のみの試掘調査を松江市が行い、橋北区域については島根県教育委員会が調査を実施した。

該当地の大橋川中流域には標高1.5～2.5mを測る低い平野が広がっている。この平野は大橋川によって運ばれた土砂が砂丘状に堆積したものであると考えられ、大橋川に近い区域では古代の遺跡は知られていないが、南側丘陵部に近くなるほど遺跡の数は増加し、平野を南北に貫く馬橋川では河川改修の際「石台遺跡」が発見されており、縄文時代から中世にかけての遺物が確認されている。

今回の試掘調査では石台遺跡の北東側地点で一箇所から縄文土器が、もう一箇所からは弥生土器片、須恵器片、土師質土器片が検出された。

調査は工事スケジュールや用地買収等の都合上、調査地を二分割し、平成19年度に北側半分（調査1区）を、平成20年度に南側半分（調査2区）を実施する計画を立てた。また、調査を実施する際は、調査地の地盤が軟弱なことから、依頼者と協議し、矢板を打設し実施することとした。

しかし、平成19年度において調査地の遺構深度から設計し、10m矢板を打ち込む計画であったが、矢板打設中に西側で岩盤にあたり、6mしか打設できず、東側の一部のみを本調査区とせざるを得ない状況となった。

平成20年度については前年の結果を踏まえ、地盤調査の上、矢板工事の設計が実施されたが、確認された地山が浅く、必要な深さまで矢板が打設できない調査区の南側15.5m×4.0mを確認した。また平成19年度において水道管埋設工事が行われている調査2区の北西側6m×6mの範囲（松江市教育委員会が工事立会）もあることから、調査範囲の取扱いについて島根県教育委員会と協議し調査範囲を決定した。

調査の期間は、調査1区が平成19年12月25日から平成20年2月28日、調査2区が平成20年10月20日から平成20年11月28日である。

第2節 発掘作業の経過

（平成19年度：調査1区）

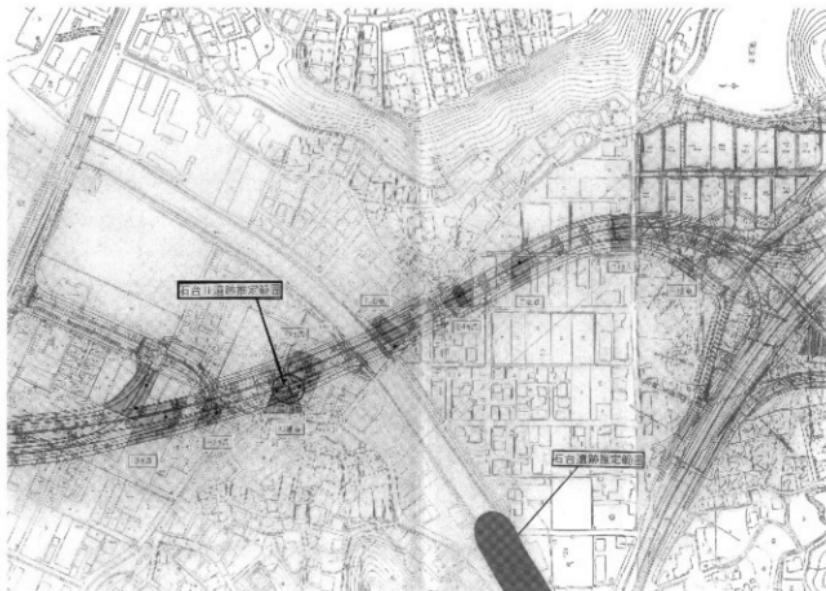
平成19年12月25日 調査区西側から開始する。

平成19年12月26日 第3層 淡灰色粘質土層まで掘る。

平成20年1月11日 調査区に中央トレンチを設定し、地表下2.5mまで掘る。

平成20年1月15日 中央トレンチを第9層 褐色泥炭層まで掘る。

平成20年1月23日 島根県教育委員会、松江市教育委員会を交えての指導会を行なう。



第3図 試掘トレンチ位置図

- 平成20年2月5日 東側を第6層 黒色粘質土層まで掘る。弥生土器等が出土。
- 平成20年2月15日 東側を第8層 濃褐色粘質土層まで掘る。縄文土器等が出土。
- 平成20年2月19日 調査区の一部を第10層 粗砂層まで掘る。
- 平成20年2月28日 調査終了。
- 平成20年3月10日 島根県教育委員会に概要報告書を提出。
- (平成20年度：調査2区)
- 平成20年10月20日 調査開始
- 平成20年11月5日 第4層 暗灰褐色土層Ⅲまで掘る。
- 平成20年11月7日 第12層 暗褐色土層IVを掘る。
- 平成20年11月14日 掘削深度が深くなったので再度梁掛け工事を行う。
- 平成20年11月17日 第16・17層 暗褐色土層V・VIを掘る。弥生土器が出土。
- 平成20年11月20日 島根大学准教授酒井哲弥氏から土層についての指導を受ける。
- 平成20年11月25日 島根県教育委員会、松江市教育委員会を交えての指導会を行う。
- 平成20年11月26日 自然科学分析用の土壤のサンプルを採取。
- 平成20年11月28日 調査終了。
- 平成20年12月19日 島根県教育委員会に概要報告書を提出。

第2章 遺跡の位置的・歴史的環境

本遺跡は松江市街中心部より南東、松江市西津田町1325番地、松江市の東を流れる馬橋川下流域の沖積地に位置する。本遺跡は南側約2kmのところにある茶臼山と大橋川とのほぼ中間地にあたり、周辺は茶臼山から北に向かって派生した台地上に多くの遺跡が存在し、本遺跡もそのような遺跡の密集地帯の中にある。

縄文時代の遺跡は、本遺跡から南へ300m、馬橋川上流部に古くから知られる石台遺跡（2）が存在する。石台遺跡は馬橋川河川改修工事や国道9号線バイパスに伴って数度の調査が行なわれ、縄文時代から中世にかけて数多くの遺物が出土している。そのほかにも保地遺跡（3）などがある。

弥生時代の遺跡は石台遺跡から中期後葉～後期初頭にかけての集落跡が確認されている。100m東側の別の丘陵にある勝負遺跡（4）からは後期前半～古墳時代中期までの集落跡が確認されている。両遺跡が継続的な関係にあったのではないかと考えられる。長峯遺跡（5）からも弥生時代中期末～後期前葉頃の住居跡が確認されている。また平所遺跡（6）からは弥生時代～古墳時代初頭にかけての玉作工房跡が検出されている。

墳墓では後期に属する四隅突出型の来美墳丘墓（7）や間内越墳丘墓群（8）がある。来美墳丘墓は墳頂部に7つの埋葬施設を持ち、間内越墳丘墓群は4基の墳丘墓が確認されている。両者は茶臼山から派生する同じ台地上にあり、距離的にも600mほどしか離れておらず、関連性が考えられる。

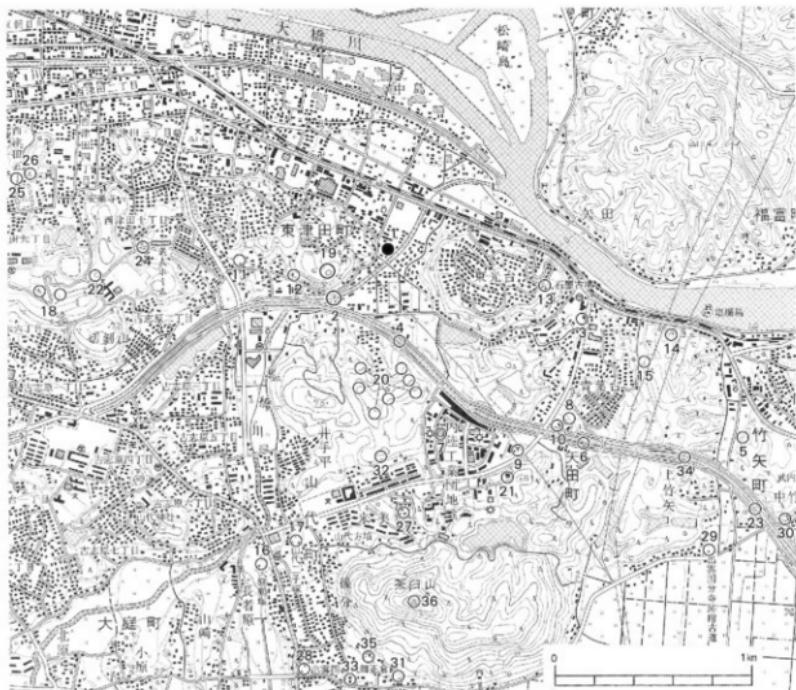
古墳時代の集落として、中期後葉の竪穴建物跡が検出された寺山小田遺跡（9）や中期の竪穴住居跡とそれに付随すると考えられる掘立柱建物跡が検出された矢田平所遺跡（10）がある。これら以外にもタミルⅣ遺跡（11）や舟津田遺跡（12）がある。

現在のところ、前期古墳は確認されていないが、中期になると多くの大形古墳が出現する。石屋古墳（13）は一辺が約40mの方墳で、造出部を持つ。手間古墳（14）は全長約70mの前方後円墳、井ノ奥4号墳（15）は全長57mの前方後円墳、一辺が約42mの方墳である大庭鶏塚（16）がある。後期になると全長92mの前方後方墳の山代二子塚（17）などがある。馬橋川流域では、築造時期は不明ながら前方後方墳の室藤1号墳（18：室藤古墳群）、高杉1号墳（19：高杉古墳群）、南外1号墳（20：南外古墳群）などが分布している。

また横穴墓も多く見られ、丘陵山腹部につくられている。十王免横穴群（21）は37穴が確認され、須恵器や土師器のほか、鉄器、玉類なども出土した。論田横穴群（22）は5穴が確認され、須恵器のほか、耳環や鐵鎌などが出土した。中竹矢遺跡（23）では5穴確認されている。これら以外にも喰ヶ谷横穴群（24）や浅井横穴群（25）、小沢横穴群（26）、狐谷横穴群（27）が存在する。

律令時代になると意宇平野周辺に出雲国庁、意宇郡家、意宇軍団、駅、出雲国山代郷正倉（28）がつくられ、官立の出雲国分寺（29）や出雲国分尼寺（30）のほか、山代郷南新造院（31）、来美廃寺（32）などの私寺も建てられるようになった。また南新造院で使用された瓦を生産したと思われる小無田II遺跡（33）や8世紀中葉から後半を中心とした集落跡であり、祭祀関連遺物も出土している才ノ岬遺跡（34）がある。中竹矢遺跡からも9世紀後半頃の掘立柱建物跡が検出されている。

中世遺跡としては12世紀代の白磁碗に伴って土師器皿が出土した中竹矢遺跡、同じく12~13世紀代の土師器が出土した石台遺跡などがある。15~16世紀代の可能性がある建物跡が確認された市場遺跡(35)、15~16世紀に機能していたと思われる茶臼山城跡(36)がある。



第4図 周辺の遺跡位置図

- | | | | |
|-------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 石台II遺跡 | 2. 石台遺跡 | 3. 保地遺跡 | 4. 勝負遺跡 |
| 5. 長峯遺跡 | 6. 平所遺跡 | 7. 来美塚丘墓 | 8. 内越塚丘墓群 |
| 9. 寺山小田遺跡 | 10. 矢田平所遺跡 | 11. 夕ミルIV遺跡 | 12. 舟津田遺跡 |
| 13. 石屋古墳 | 14. 手間古墳 | 15. 井ノ奥4号墳 | 16. 大庭鶏塚 |
| 17. 山代二子塚 | 18. 室藤古墳群 | 19. 高杉古墳群 | 20. 南外古墳群 |
| 21. 十王免横穴群 | 22. 论田横穴群 | 23. 中竹矢遺跡 | 24. 嘉ヶ谷横穴群 |
| 25. 浅井横穴群 | 26. 小沢横穴群 | 27. 狐谷横穴群 | 28. 出雲国山代郷正倉 |
| 29. 出雲国分寺 | 30. 出雲国分尼寺 | 31. 山代郷南新造院 | 32. 来美庵寺 |
| 33. 小無田II遺跡 | 34. 才ノ岬遺跡 | 35. 市場遺跡 | 36. 茶臼山城跡 |

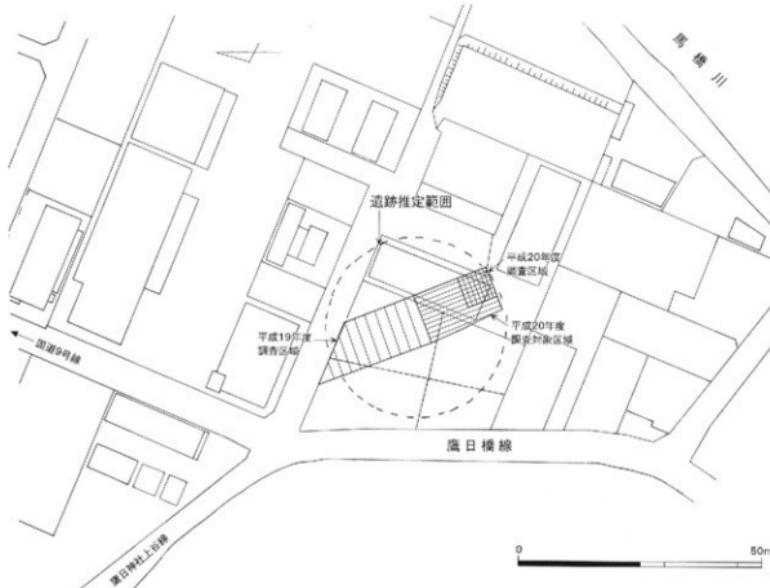
第3章 調査成果

第1節 調査の概要

今回は調査の安全を図るためにまず矢板を打ち込み、その中をあらかじめ1.2~1.5m前後、重機によって掘り下げ、矢板に梁掛けを行なった後に調査を開始した。工事工程などの事情により調査地を2分割し、平成19年度に北側半分（調査1区）の約180m²、平成20年度に南側半分（調査2区）の約160m²の調査区を設定した。調査2区は後日、島根県教育委員会と事前協議の上、調査範囲を40m²とした。

調査1区では、西側で6mしか矢板が打ち込めず、安全上、掘削可能な深度は西側で地表下1.5m、東側で地表下2.5mまでであり、それ以上は掘り下げられなかった。調査2区では10m矢板を打ち込むことができたので、安全深度は地表下4mであった。調査は地表下1.2mから1.5m前後から始め、土層観察用の畦を残しながら、人力によって各層ごとに掘り下げていった。

調査の結果、両調査区から造構は確認されず、遺物包含層のみが確認された。調査1区では縄文土器や弥生土器、中世の土師質土器など広範な時期の遺物が出土した。調査2区では弥生時代中期頃の土器を中心とする上層の包含層と縄文時代晚期から弥生時代前期頃の土器を中心とする下層の包含層が確認された。中世の遺物は数点出土した。



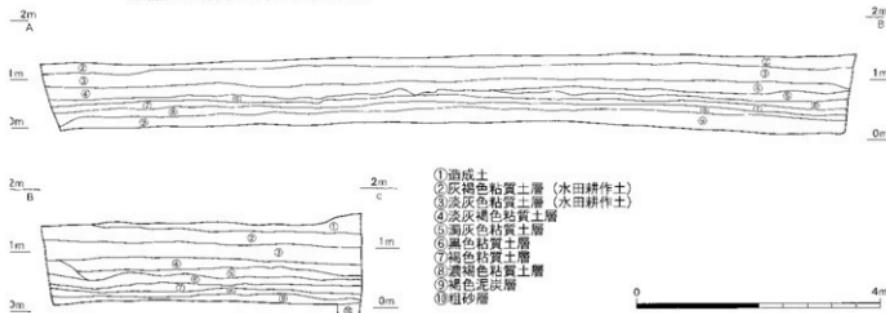
第5図 調査区位置図

第2節 調査1区

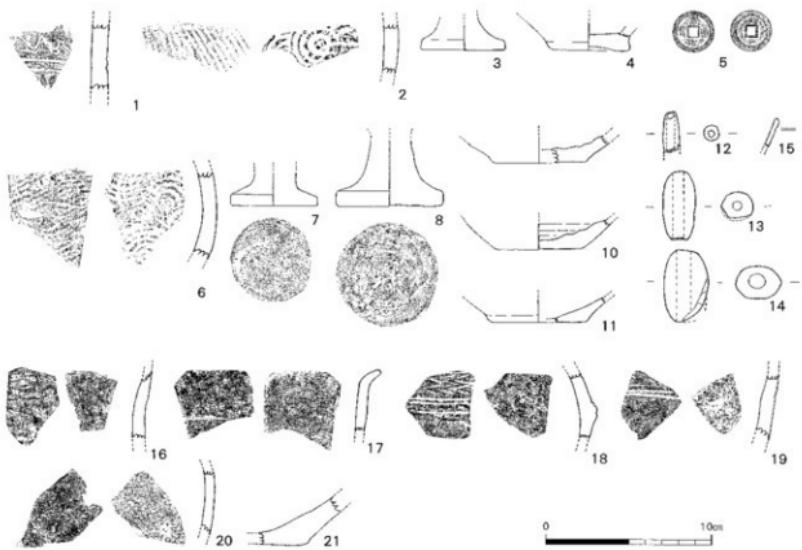
1. 土層堆積状況について

中央に土層観察用の畦を残しながら掘り下げた。深さ1.5m付近でもプラスチック製品などを含む造成土であったので、矢板内をすべて1.5mまで掘り下げた。安全上、西側はこれ以上掘り下げることができず、東側だけを掘り下げるところとなった。調査区内中央にL字状のトレンチを設定し土層観察をしながら各層を掘り下げた。土層について上から順に説明していく(第6図)。

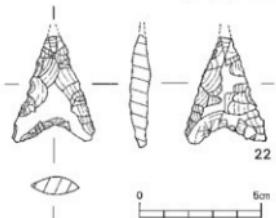
- 第1層 造成土 様々な土質からなる客土層である。空缶や空瓶など現代遺物を多数含んでいた。
- 第2層 灰褐色粘質土層 水田の耕作土と思われる。黒曜石の剥片や土器が多数出土した。土器は極めて小さく、割れ口が丸みを帯びていた。須恵器や中世土師器、銭貨(寛永通寶)などが出土した(第7図1~5)。
- 第3層 淡灰色粘質土層 水田の床土と思われる。第2層に近いものの、若干砂が混じる。出土遺物は須恵器や中世土器、白磁片などが出土した(第7図6~15)。
- 第4層 淡灰褐色粘質土層 第3層に近く、砂の混入が少ない。遺物の出土状況は第3層と同じである。
- 第5層 濁灰色粘質土層 第4層と第6層が混じり合った層である。遺物はほとんど出土しなかった。
- 第6層 黒色土層 泥炭を少し含む層で、厚さは10cm前後を測る。遺物は弥生時代前期の特徴を持つ土器片が多く出土し、須恵器片も1片共伴した。
- 第7層 褐色粘質土層 泥炭を少し含む層で、若干の弥生土器片が出土した。
- 第8層 濁褐色粘質土層 泥炭を少し含む層。この層の直上から番線を伴った松材が出土した。材自身の重みで沈み込んだ可能性もあるが、これより上層は一度、削平された昭和以降の堆積とも考えられる。この層からは縄文土器片や黒曜石片が出土した。
- 第9層 褐色泥炭層 植物遺体層。場所によって薄い砂層の筋も見られた。遺物は出土しなかった。
- 第10層 粗砂層 植物遺体を多く含む層。一部しか掘らなかったため、全容はわからないが、縄文土器片や黒曜石片が出土した。



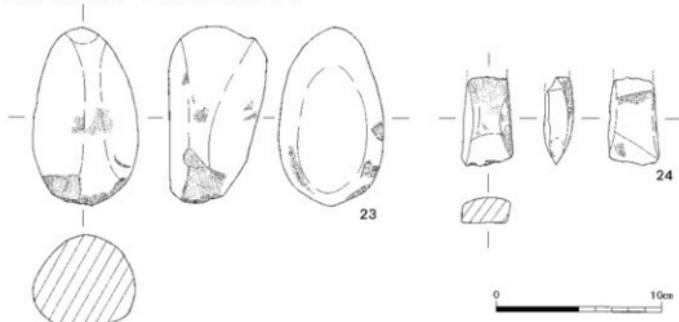
第6図 1区 土層断面図



第7図 灰褐色粘質土層～黒色粘質土層 出土遺物実測図



第8図 淡灰色粘質土層 出土遺物実測図(1)



第9図 淡灰色粘質土層 出土遺物実測図(2)

○ 土師質土器（第7図3・4） 3は脚付の皿形もしくは壺形土器の脚部部分。底部の切り離しは回転糸切りと思われるが、痕跡が風化しているため、詳細は不明である。4は皿形あるいは壺形土器。底部の切り離しは回転糸切りと思われるが、痕跡が風化しているため、詳細は不明である。

○ 銭貨（第7-5図） 5は寛永通寶。裏面に「文」が鋳られているため、文銭である。

2 【第3層 淡灰色土層出土遺物】（第7図6～15、第9図、第10図）

○ 須恵器（第7図6） 6は外面に平行タタキ痕が、裏面は同心円状タタキ痕が見られる。

○ 土師質土器（第7図7～11） 7・8は脚付の皿形もしくは壺形土器の脚部部分。底部は回転糸切りを施されている。9～11は皿形もしくは壺形土器。口クロ成形で、底部の切り離しは回転糸切りと思われるが、痕跡が風化しているため、詳細は不明である。

○ 土錐（第7図12～14） 12～14は土錐。すべて円筒形をしている。

○ 磁器（第7-15図） 15は白磁の口縁部片。12世紀代の中国製と思われる。

○ 石器（第8・9図） 22は黒曜石製の凹基式石鎌。先端部がわずかに欠け、抉りの部分はやや浅めである。23は敲石。断面形は底が平らで、三角形に近い形状をしており、握りやすい。先端部に敲打痕が顕著に残る。24は磨製石斧。刃部側が残存している。局部的に磨耗している。

3 【第6層 黒色粘質土層 出土遺物】（第7図16～21）

○ 繩文土器（第7図16） 16は縄文土器の深鉢と思われる。外面はナデ調整を施す。

○ 弥生土器（第7図17～21） 弥生時代前期の特徴を持つ土器片である。17は甕の口縁部片で、口縁部がゆるく外反し、外面にヘラ描きによる1条の沈線を施す。18は甕の胴部片。胴部最大径付近に突帯を有する。直線文と羽状文を施す。19は甕の胴部片。外面に3条の直線文を施す。20は甕の胴部片。ハケ調整の後、列点文を施す。21は甕・甕類の底部片。外面にわずかにミガキ痕が残る。

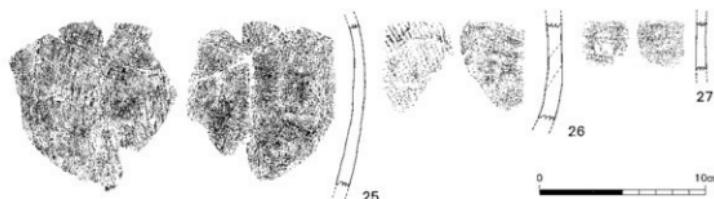
4 【第8層 濃褐色粘質土層 出土遺物】（第10図25・26）

○ 繩文土器 25は深鉢の胴部片。外面に条痕、内面はナデ調整を施す。

○ 弥生土器 26は弥生土器の甕もしくは甕の胴部片。外面はハケ調整を施す。器壁がやや厚い。

5 【第10層 粗砂層 出土遺物】（第10図27）

○ 繩文土器 27は深鉢の胴部片。外面に条痕、内面はナデ調整を施す。器壁がやや厚い。



第10図 濃褐色粘質土層～粗砂層 出土遺物実測図

第3節 調査2区

1. 土層堆積状況について

調査1区と同じく矢板を打設しての調査となった。調査は6.3m四方の調査区に、南北方向に土層観察用の畦を残し、東西に調査区を分け、各調査区の四辺に溝を掘りながら、東西の調査区の中央部分が常に台地上に残るようにして、層ごとに掘り下げていった。途中、地表下約2.5m付近で再度、梁掛け工事を行った。最終的に海拔-0.7m付近まで掘り下げた。

調査の結果、得られた上層堆積状況の概略は以下の通りである。

第1層は青灰色土層で、コンクリート片やブロック片などを含んだ層で、非常に摩滅の著しい土師器の小片が出土した。

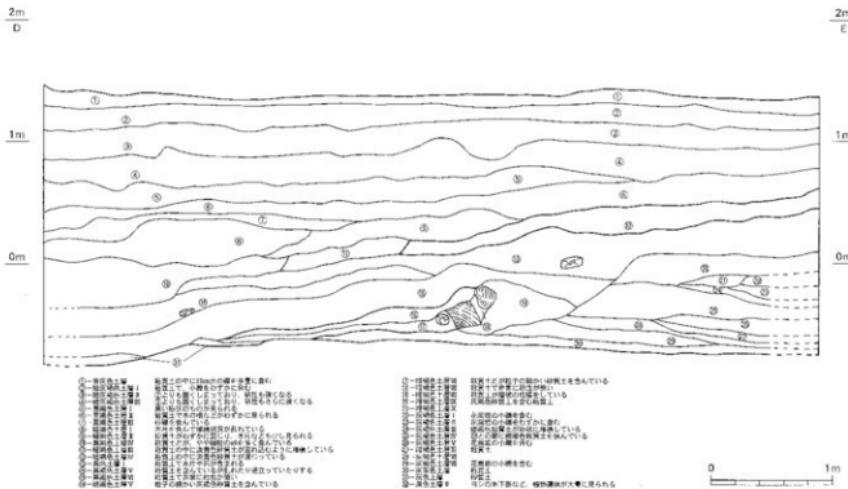
第2～4層は暗黒褐色粘質土層で、粘性が強く、固く縮まっている。摩滅した土師器や須恵器のはか、近代の陶器も出土した。

第5～7層は黒褐色粘質土層で、第5層は黒く筋状のものが見られ、第7層はわずかに砂粒が含まれる。これらの層から遺物は出土しなかった。

第8・9層は暗褐色粘質土層。第8層は砂粒が筋状に入り、小さな木片が見られる。第9層には場所によって数cm程度砂質土が堆積している。これらの層から遺物は出土しなかった。

第10層は黒褐色粘質土層。砂粒や淡黄褐色のブロック上の塊が雑然と混入していた。土層の乱れから、人為的な搅乱、または水田であった可能性がある。これらの層から遺物は出土しなかった。

第11層は暗褐色土層で、砂質土が層状に堆積している。砂質土が層状に堆積しているのは洪水時に見られる層だが、砂質土の広がりがあまりなかったことから、小規模の洪水と思われる。



第11図 2区 土層断面図

第12層は暗褐色土層で、砂質土を含んでいる。この層から弥生時代中期の特徴を持つ土器（第12図）を中心に出土し、農耕具と思われる木製品（第17図87）も出土した。

第13層は黒色粘質土層。自然の流木や礫がわずかに含まれる。土器などは出土しなかった。

第14・15層は黒褐色粘質土層。これらの層から遺物は出土しなかった。

第16・17層は灰色砂質土を含んだ暗褐色土層。縄文時代晚期から弥生時代前期の特徴を持つ土器が多く出土した（第13～16図）。このほかにも黒曜石の剥片や木製品（第17図89・90）も出土した。両層は類似しており、遺物を取り上げる段階では区別が付かず、層位別の取り上げはできなかった。

第18・19層は暗褐色土層で、自然堆積層。16・17層との境から1辺が20cm前後の木を2本検出した。これが人為的に並べられたものか自然に流れ込んできたかは不明である。これらの層から他の遺物は出土しなかった。

第20～29層は河川堆積層と思われる層で、比較的小規模な川の堆積層と想定される。この河川堆積層は小さなブロック状の花崗岩を含んだ砂質土や粘質土が筋状に入った砂質土、粘質土で形成されている。これは河川と地表面との高低差があまりないことを示している。つまり河川が流れている時に砂質土が堆積し、途中その流れが弱くなったり、なくなったりした時に粘質土が堆積する。そしてまた流れを取り戻した時に砂質土が堆積する。それを繰り返しているのである。

第20層から第29層にかけて抉られたようになっているのは、この付近を流れていた河川の流れが変化したために起きた自然現象の一つである。よって第19層以上の層はそれ以後に堆積したことになる。

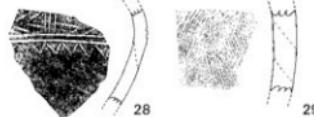
第30層は灰茶色粘質土層。第31層は灰色砂質土層、いずれも自然堆積層である。

第32層は黒色粘質土層。植物遺体層で、湿地帯によく見られる層。葦の根や地下茎が多く含まれる。

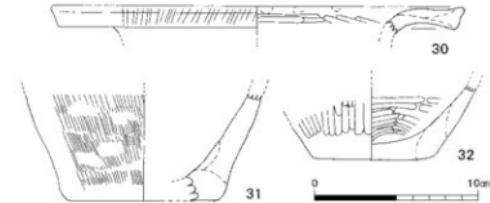
2. 遺物について

1 【第12層 暗褐色土層IV 出土遺物】（第12図、第17図1）

○ 弥生土器（第12図） 28・29は弥生時代前期の特徴を持つ土器である。28は壺の胴部片。文様帶が縦方向のヘラ描き直線文によって区画され、その中を横方向の羽状文を貝殻腹縁で施す。その下に横方向のヘラ描き直線文を施し、さらにその下に縦方向の貝殻腹縁による羽状文を施す。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。29は甕類の胴部片。内外面ともハケ調整を施す。



30～32は弥生時代中期の特徴をもつ土器片である。30は壺の口縁部片。口縁部が大きく開き、口縁端部がわずかに拡張する。口唇部外面はナデ調整の後、細かな刻目を施し、内面はヘラミガキを施す。31は甕の底部片。外面に



第12図 上層遺物包含層 出土遺物実測図

ハケ調整を施す。32は壺甌類の底部片。内外面ともヘラミガキを施す。

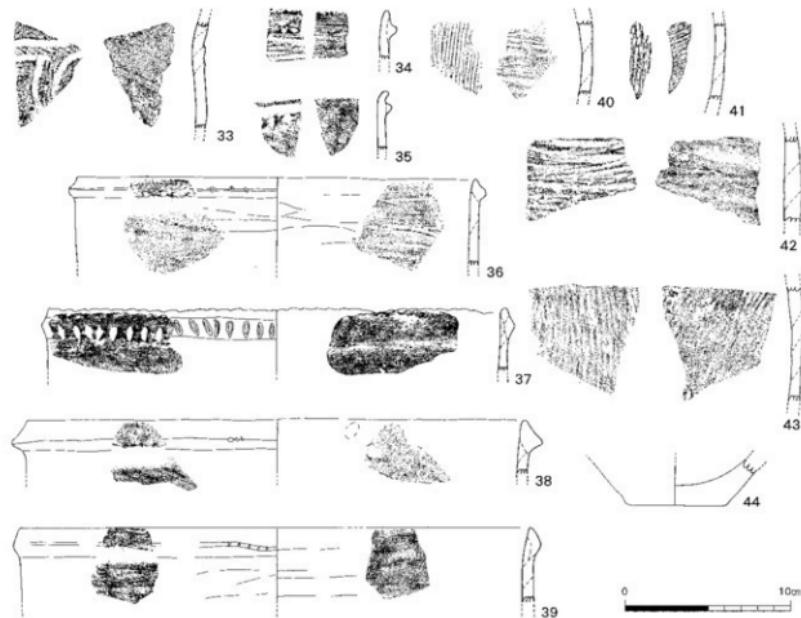
○ 木製品（第17図88）

弥生時代中期頃の土器と共に伴する木製品。身の上端が直線的な楕円形を呈し、断面形は身の中心からやや盛り上がる。柄孔の直径は2.5cmを測り、身の上の端に直径0.3~0.4cmの穿孔が4.7cm間隔で2穴ある。形状から農耕具の泥除けの一部と考えられる。

2 【第15・16層 暗褐色土層V・VI 出土遺物】（第13~17図88・89）

○ 繩文土器（第13図） 33は縄文時代後期の特徴を持つ深鉢の胴部片。磨消繩文が見られる。34~44は縄文時代晩期の特徴を持つ。34~39は突帯文系の深鉢の口縁部片で、突帯部に刻目を施す。34・37は明確に刻目が認識できるが、それ以外はかすかな痕跡しか残っていない。34は口縁端部にも刻目を入れる。40~43は深鉢の胴部片。外面に条痕が、内面にナデ調整の痕跡が残る。44は深鉢の底部片。平底で調整方法は不明。

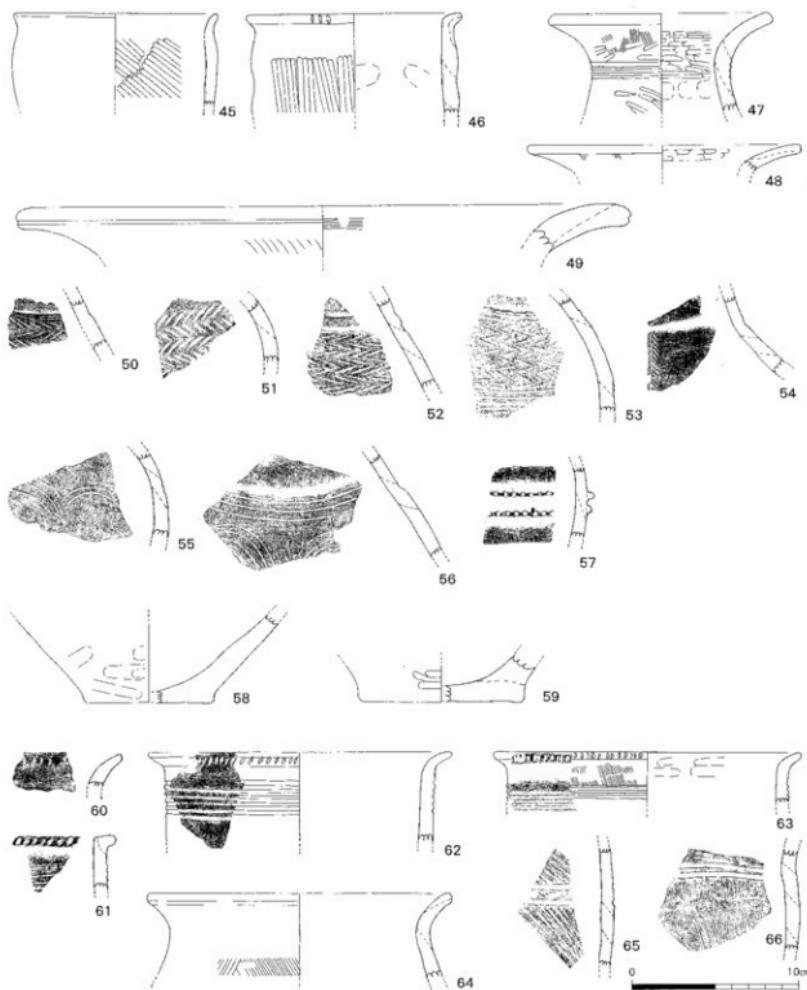
○ 弥生土器（第14~16図） 第14図は弥生時代前期の特徴を持つ壺・甌である。45・46は小形の鉢と思われる口縁部片。45は口縁部がゆるく外反する形態。外面はハケ目のような痕跡が見えるが、ススが付着していてはっきりと認識できない。内面はヘラ磨きを施す。46は口縁部が45よりも角度をつけて外反する。口唇部に刻目を施し、外面はナデ調整とヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。



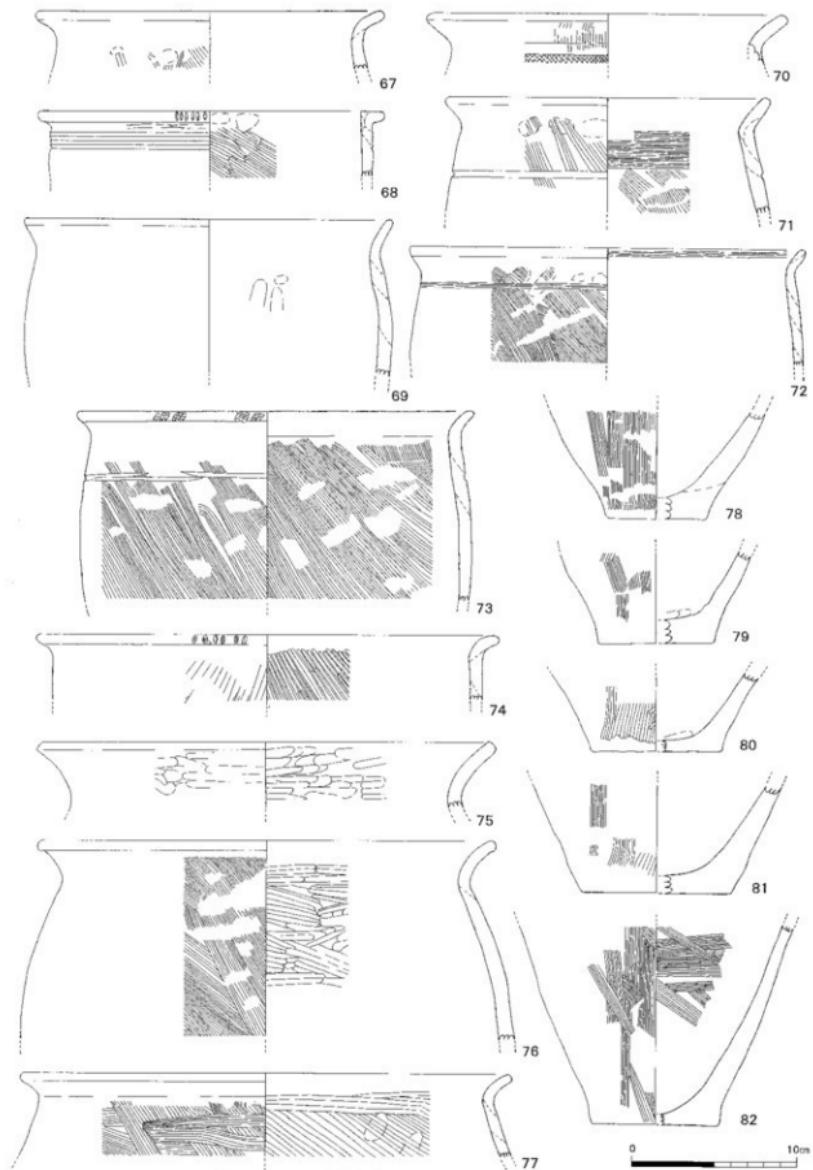
第13図 下層遺物包含層 出土遺物実測図（1）

47～49は広口壺の口縁部である。いずれも口縁部がやや大きく外反し、頸部が筒状になる形態と思われる。47は外面に二枚貝による3条の直線文が描かれ、ハケ調整の後、やや雑なヘラミガキを、内面にもヘラミガキを施す。48の外面はハケ目の痕跡がわずかに残り、内面はヘラミガキを施す。49は口唇部に凹線を描き、内外面ともにハケ目の痕跡がわずかに残る。

50～57は壺の胴部片。50～53は貝殻腹縁による羽状文が描かれている。50・53はかすかな段を持ち、



第14図 下層遺物包含層「出土遺物実測図（2）」



第15図 下層遺物包含層 出土遺物実測図 (3)

52・53は直線文も描かれている。また52の内面はヘラミガキを施している。54はわずかに段を持ち、有軸羽状文を描く。内外面ともヘラミガキを施す。55・56はヘラ描きによる三重の重弧文を描いている。56は不明瞭な段を持ち、直線文も描く。両方とも内外面にヘラミガキを施す。57は2条の突帯を胴部最大径付近に貼付け、その上に細かな刻目をつける内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。

58・59は壺の底部片。ともに胴部に向けて外側にやや大きく広がる。外面はヘラミガキを施す。

60～64は甕の口縁部片。60は口縁部がゆるく外反するもので、口唇下端部に刻目をつける。61は口縁部が逆L字状になるもので、口唇部に刻目をつけ、頸部付近にはヘラ描きによる直線文を描く。62・63は口縁部が逆L字状に近い形態で、口唇部に刻目をつけ、頸部付近には62は5条、63は3条以上のヘラ描きによる直線文を描く。63は口縁部の下はハケ調整を施す。64は口縁部が「く」字状に外反し、口唇部がやや肥厚する形態で、わずかにハケ調整の痕跡が残る。

65は胴部片。2条のヘラ描き直線文を描き、その間に刺突文を描く。66は甕の頸部から胴部にかけての破片。2条のヘラ描き直線文の下にハケ調整を施す。

第15図は弥生時代前期の特徴を持つ甕である。

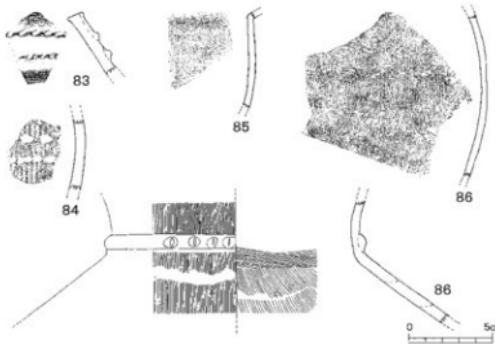
67・69はゆるく口縁部が外反する形態で、68は口縁部が逆L字状になる形態で、口唇部に刻目をつけ、頸部付近に4条のヘラ描きによる直線文を描く。

70～72は口縁部が「く」字状に外反する形態で、70は縦方向の羽状文を描き、ハケ調整を施す。71は胴部付近にヘラ描きによる1条の直線文を描き、内外面ともハケ調整を施す。72は外面頸部付近と内面口唇部にヘラ描きによる直線文を描く。外面はハケ調整を施すが、内面は不明。

73～77は口縁部が「く」字状に外反する形態。73・74は口唇部に刻目をもち、73はヘラ描きによる直線文を描き、内外面ともハケ調整を施す。74の外面はハケ調整、内面はヘラミガキを施す。75は内外面ともヘラミガキを施す。76は口唇部をやや肥厚させ、下端部をつまみ出すような形態。外面はハケ調整を、内面はヘラミガキを施す。77は内外面ともハケ調整を施す。

78～82は甕の底部片。78の外面にヘラミガキを施している以外は、外面はハケ調整を施す。全体的に器壁が厚くつくられている。

第16図は弥生時代中期の特徴を持つ土器である。83は無頸甕の口縁部片で口縁部に向かってすぼまる形態。2条の貼付突帯の上に細かな刻目をつけ、内面はハケ調整を施す。84は甕の胴部片。2段にわたって刺突文を描いている。85は甕の頸部から胴部にかけての破片。口縁部がゆるく外反する形態で、器壁が薄く、外面はハケ調整を施す。86は甕の胴部片。器壁が薄く、ハケ調整の後、列点文を描く。87は甕の頸部

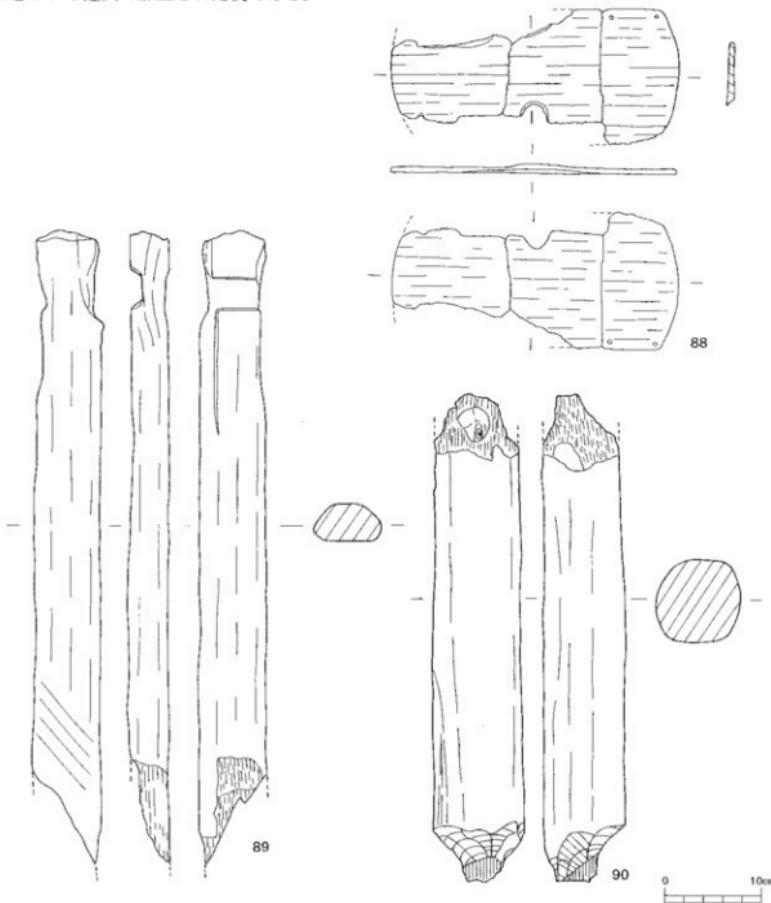


第16図 下層遺物包含層 出土遺物実測図（4）

から頸部にかけての破片。頸部から胴部に向けて大きく開く形状。頸部に突帯を貼付け、指頭圧痕文帶をつける。内外面ともハケ調整を施す。

木製品（第17図89・90）

縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての土器と共に伴する木製品である。89は建築部材の一部と思われる。断面形は半月状を呈し、上側は把手状に加工されている。加工されている所はホゾ状になっており、長さ3.3cm、幅4.7cm、深さ1.3cmを測り、先端部分もやや丸くなっている。90は先端部が石製と思われる道具で加工された杭である。



第17図 遺物包含層 出土遺物実測図

第4章 石台II遺跡発掘調査に伴う花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

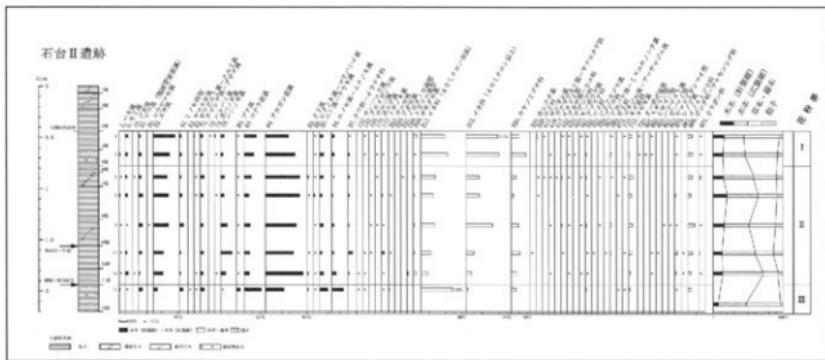
1 はじめに

石台II遺跡は、島根県東部松江市東津田町に位置し、中国山地山麓を水源に持つ馬橋川と大橋川の合流地付近の沖積低地に立地する。本報は、遺跡内での稲作の実体を明らかにする目的で実施した花粉分析業務の概報である。

2 試料・分析方法・分析結果について

発掘トレンチ内で試料を採取した。試料採取地点の模式柱状図および分析試料の採取層準を図1の花粉ダイアグラム中に示す。分析試料が採取試料の一部であったことから、試料番号には抜けが生じている。

花粉分析処理は、渡辺（1995）に従った。分析結果を図1の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、計数した木本花粉を基數にし、各々の木本花粉、草本花粉、一部の胞子について百分率を算出してスペクトルで表した。また右端に示した花粉総合ダイアグラムでは、木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基數として、分類群ごとに累積百分率として示した。また中村（1974）に従い、イネを含む可能性の高いイネ科（40ミクロン以上）とイネを含む可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分している。



第18 図 花粉ダイアグラム

3 花粉分帯

花粉分析結果を基に、局地花粉帯を設定した。以下に、下位から上位に向けて各花粉帯の特徴を述べる。

(1) III 帯 (試料No.14)

花粉化石の含有量がやや少なかった。アカガシ亜属が23%、コナラ亜属が21%、ニレ属-ケヤキ属が10%、エノキ属-ムクノキ属が15%の出現率を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン未満）が89%の出現率を示す。

(2) II 帯 (試料No.12～5)

アカガシ亜属が34～46%と、高率でほぼ一定の割合を示す。一方、スギ属は12～最大19%まで増加傾向を示す。またマツ属（複維管束亜属）、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属はそれぞれ10%未満であるが、その外の種類に比べ高率を示す。

(3) I 帯 (試料No.3, 1)

スギ属がさらに増加し、27%になる。一方、アカガシ亜属は減少傾向を示し、28%になる。この外、コナラ亜属が15%まで増加する。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が40%を越える。

4 堆積時期の推定（花粉層序）

ここでは、渡辺（2009）の地域花粉帯と対比し、各花粉帯の堆積時期について考察する。渡辺（2009）の地域花粉帯は、大西ほか（1990）によってまとめられた中海・宍道湖地域の地域花粉帯を最新の成果を基に再設定したものである。ただし、基となるデータの多くは中海・宍道湖湖底堆積物と出雲平野、目久美遺跡（米子市）で得られたもので、松江市内では西川津遺跡と出雲国府跡のデータが利用されているに過ぎない。

地域花粉帯との対比のポイントは、今回得られた分析結果（花粉化石群集）ではスギ属が増加傾向を示すこと、マツ属（複維管束亜属）が低率であること、さらにアカガシ亜属が高率で出現することである。これらの特徴は、アカガシ亜属・シイノキ属-スギ属亜帯の特徴と一致する。スギ属亜帯は縄文時代晩期の2900 yrs BP頃から弥生時代中期の1980 yrs BP頃までの植生を示しているとされている。また、最下位のIII帯ではアカガシ亜属の出現率はさほど高くなく、コナラ亜属と同程度であるほか、ブナ属、ニレ科の諸属が特徴的に検出される。またスギ属については、増加前の状態か増加傾向を示してゐる状態かの判断ができない。これらの特徴は、アカガシ亜属・シイノキ属-マキ属亜帯後半の特徴と似る。マキ属亜帯は縄文時代後期の4100 yrs BP頃から2900 yrs BP頃までの植生を示しているとされている。

5 古環境（古植生）の推定

花粉帯毎に古植生を推定する。植生の変化を時間軸に沿って、古い時期から新しい時期へと示すために、ここでは下位のIII帯から示す。

(1) III 帯（縄文時代後期頃から弥生時代前期頃）

腐植に富む層相であることと、イネ科（40ミクン未満）花粉が高率で検出されることから、調査地点は大橋川の支流である馬橋川河口域の湿地であり、アシの生い茂る環境であったと考えられる。木本花粉ではニレ科（ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属）の出現率が高いほか、コナラ亜属の出現率も比較的高い。これらはいわゆる河畔林（自然堤防林）の要素であり、活発な沖積作用に伴い自然堤防林が発達したと考えられる。また丘陵上は、カシ類を主要素とする照葉樹林で覆われていたと考えられる。

（2）Ⅱ带（弥生時代中期）

中部で砂、上部で礫が混入するものの、比較的均質な粘土から成る。イネ科（40ミクン以上）が増加傾向を示すが、さほど高率にならない。また、イネ科（40ミクン未満）やカヤツリグサ科がイネ科（40ミクン以上）と同程度の出現率を示す事から、近辺で稲作が行われていた可能性はあるが、この場所で稲作が行われていた可能性は低い。ただし、試料No.8層準（10層）では砂が混ざり、イネ科（40ミクン以上）が小ピークを成すなど、層相と花粉化石群集の両面から判断して、Ⅱ帶の中では耕作層である可能性の最も高い層準である。

木本花粉ではアカガシ亜属が引き続き高率を示し、周辺の丘陵上は引き続き、カシ類を主要素とする照葉樹林で覆われていたと考えられる。また、沖積作用に因って広がりつつある平野には、スギが進入し林分をなしつつあったと考えられる。

（3）Ⅰ带（弥生時代中期）

イネ科（40ミクン以上）の出現率がさらに高くなる。一方でイネ科（40ミクン未満）やカヤツリグサ科の割合も高くなるなど、この場所で稲作が行われていた可能性は下位のⅡ帶に比べ高いが、否定的な要素もある。今後、プラント・オパール分析を実施して、稲作の確認をする必用がある。

木本ではアカガシ亜属がやや低率になり、コナラ亜属が増加する。また、スギ属は引き続き増加傾向にある。丘陵上のカシ林は伐採され、一部でコナラ類を主要素とする二次林に変わっていったと考えられる。また、低地ではスギが林分を成すようになっていったと考えられる。

6 まとめ

石台Ⅱ遺跡における農耕についての確認を行う目的で、花粉分析を実施し、解析を行った。解析の結果は、以下に示すとおりである。

- (1) 得られた花粉化石群集から局地花粉帯のⅠ～Ⅲ帯を設定した。さらに、渡辺（2009）の地域花粉帶での花粉化石群集の比較を行い、Ⅰ、Ⅱ帶をアカガシ亜属シノノキ属帶スギ属亜帶に、Ⅲ帶をアカガシ亜属シノノキ属帶マキ属亜帶に対比した。
- (2) 上述の対比結果と出土遺物の関係から、Ⅲ帶は縄文時代後期～晩期、Ⅱ、Ⅰ帶は弥生時代中期に堆積したと考えられる。ただしこの年代観は花粉層序学的な対応関係から推定されたものであり、今後、出土遺物、¹⁴C年代測定などにより検証する必用がある。
- (3) 調査地では、Ⅰ帶及びⅡ帶中部（8層）において稲作が行われた可能性が指摘できる。ただし、稲作の指標とされるイネ科（40ミクン以上）花粉の出現率はさほど高くなく、湿生植物のイネ科（40ミクン以上）花粉が高率で検出されることから、調査地点は大橋川の支流である馬橋川河口域の湿地であり、アシの生い茂る環境であったと考えられる。木本花粉ではニレ科（ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属）の出現率が高いほか、コナラ亜属の出現率も比較的高い。これらはいわゆる河畔林（自然堤防林）の要素であり、活発な沖積作用に伴い自然堤防林が発達したと考えられる。また丘陵上は、カシ類を主要素とする照葉樹林で覆われていたと考えられる。

印未満)、カヤツリグサ科が同程度の出現率を示す事から、調査地近辺（あるいは馬橋川上流）からもたらされた可能性もある。他の層準ではイネ科（40ミクロン以上）の出現率が低く、調査地で稲作が行われたとは考えにくい。ただし稲作を断定するためには、プラント・オパール分析による高密度での「イネ」の検出および、耕作遺構の検出が必要である。

(3) 調査地周辺の丘陵および平野部の古植生を推定した。特筆すべき事柄は、以下の通りである。

① Ⅲ带の時期には、調査地点近辺にはアシ原が広がっていた。

調査した期間を通じ、丘陵上はカシ類を主要素とする照葉樹林で覆われていた。

② ただしⅠ带の時期に入ると、照葉樹林の一部はコナラ林に変わった。

③ Ⅱ带の時期以降、スギ林が平野内で認められるようになった。

引用文献

中村 純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.

渡辺正巳 (2009) 山陰地方における完新世の花粉層序と古環境－花粉考古学を用いて－、島根大学博士論文

第5章　まとめ

今回の調査では遺構はなく、1区での出土遺物は時期幅が広く、2区では比較的まとまりをもつ上・下2層の遺物包含層が確認できた。自然科学分析によって遺跡周辺の古環境がある程度、推測することができたので、ここでは調査結果をふまえて若干の考察をおこないたい。

【土層堆積状況について】

1区では安全上、深く掘り下げることはできず断言はできないが、2区の土層堆積状況から、まずこの周辺は葦などが生息する湿地帯であったことが伺える。それは第11図の土層断面図から第32層が植物遺体層や地下茎を含んだ層であったことや花粉分析から判断できる。その後、現在約50m東を流れている馬橋川がこの周辺を流れて、第20～29層の河川堆積層が形成されたと思われる。この河川堆積層に含まれる小さなブロック状の花崗岩は、馬橋川が山を削って流れていたことを示している。

次に馬橋川の流れが東に移動し、周辺が陸地になってしまふ。海拔0m付近よりも下層を見ると、東側の馬橋川に向けて土層が下がりながら堆積している。川が移動する際に、河川堆積層が引き潮のように移動してしまったため、河川堆積層の第20～29層が抉られたような形状になったと考えられる。

陸地になったこの周辺は、その後、縄文時代晚期から弥生時代前期、弥生時代中期にかけて遺物とともに土砂が堆積し、また中世においても同じように遺物とともに土砂が流れ込んできた。遺構が確認されなかっただため、別の場所にあった遺跡から流れ込んできたものと思われる。

また弥生時代中期以降の土層から、稲作が行われていた可能性を示すデータが土壤分析によって得られていることも、この周辺の歴史を考える上で重要な資料になるかもしれない。

【遺物について】

縄文時代の遺物は後期が1点、晩期は数十点、それ以外は時期判別が不明である。晩期の土器は突帯文系土器で、刻目がつけられている。1992年度の石台遺跡発掘調査においても大量の縄文晩期の土器が出土しており、その時には晩期前半の突帯文を持たない土器も出土している。本遺跡では突帯文が中心であることから晩期後半と考えられる。

弥生時代前期の土器は、「出雲原山様式」や松木編年のI-1様式の前期初頭のものではなく、I-2～4様式を中心とする。縄文晩期の土器とI-2様式の土器が共伴する遺跡は、鹿島町の北講武氏元遺跡があり、共伴関係が確認できた事例である。

弥生時代中期の土器はIII-1様式に見られるような口縁部が大きく朝顔状に開く壺が出土しているが、全体的に形態が判別できるものは少ない。1987年度の石台遺跡発掘調査では弥生時代中期後葉から後期初頭にかけての集落が確認されているが、それらの時期に該当する土器は確認できなかった。

中世の土師質土器では高台のない皿形もしくは坪形土器と脚部の長い皿形もしくは坪形土器が出土した。同様の形態の土師質土器は1985年度の石台遺跡発掘調査で大量に出土し、12～13世紀代と考えられている。本遺跡の土師質土器もその時期に近いところにあると推測される。

遺構が確認されなかっただため、出土した遺物は周辺からの流れ込みと考えられるが、過去の石台遺跡の調査などから周辺には原始から中世にかけて、様々な時代の集落が存在していた可能性がある。今後、馬橋川流域の遺跡を考える上で、本遺跡が重要な手がかりになるかもしれない。

〔参考文献〕

- 岡崎雄二郎「山陰の縄文後・晚期の諸問題—特に松江・石台遺跡を中心として—」『日本考古学協会昭和52年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1977年
- 前島己基「糸痕のついた縄文式土器の破片」『季刊文化財 第31号』 島根県文化財愛護協会 1977年
- 岡崎雄二郎・恩田清「石台遺跡について」『松江考古 創刊号』 松江考古学談話会 1978年
- 『国道9号線バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 島根県教育委員会 1981年
- 『国道9号線バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』 島根県教育委員会 1983年
- 『島根県埋蔵文化財調査報告書 第X集』島根県教育委員会 1983年
- 川原和人「島根県における縄文晚期凸帯文土器の一試考—松江石台遺跡出土の凸帯文土器を中心にして—」『島根考古学会誌 1』 島根考古学会 1984年
- 『石台遺跡—馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告—』 島根県教育委員会 1986年
- 『国道9号線バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書VII 石台遺跡』 島根県教育委員会 1988年
- 江川幸子・内田律雄「石台遺跡の試掘調査—炭化米を出土した縄文晚期の上墳—」『季刊文化財 第62号』 島根県文化財愛護協会 1988年
- 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡』 鹿島町教育委員会 1989年
- 正岡睦夫・松木岩雄『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編』 木耳社 1992年
- 広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古 第8号』 松江考古学談話会 1992年
- 広江耕史「島根県内における中世の遺跡について『中世土器研究 66』中世土器研究会 1992年
- 『石台遺跡Ⅱ—馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告—』 島根県教育委員会 1993年
- 『第16回中四国縄文研究会 縄文時代晚期の山陰地方 発表資料集』 中四国縄文研究会 2005年
- 『島根県古代文化センター調査研究報告書33 島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006年

遺物観察表

検査番号	種別 器種	出土位置	法量(cm)			形態・文様の特徴	調査	備考
			口径	底径	残存高			
7-1	須恵器 甕	1区 灰褐色粘質土	—	—	4.0	2条の波状文と2条の沈線を施す		頭部片
7-2	須恵器 甕	1区 灰褐色粘質土	—	—	3.0		(外) 平行タタキ痕 (内) 同心円当具縁	脚部片
7-3	土師質土器 縦付直唇もしくは环唇上器	1区 灰褐色粘質土	—	5.1	1.8	底面回転糸切？(風化が激しく不明)		底部片
7-4	土師質土器 直唇もしくは环唇上器	1区 灰褐色粘質土	—	4.8	1.8	底面回転糸切？(風化が激しく不明)		底部片
7-5	銘貨 寛永通寶	1区 灰褐色粘質土	直径 2.5	孔径 0.6	2.88	裏面に「文」		完形品
7-6	須恵器 甕	1区 淡灰色粘質土	—	—	5.2		(外) 平行タタキ痕 (内) 同心円当具縁	頭部片
7-7	土師質土器 縦付直唇もしくは环唇下器	1区 淡灰色粘質土	—	5.1	2.1	底面回転糸切	回転ナデ	高台部片
7-8	土師質土器 縦付直唇もしくは环唇上器	1区 淡灰色粘質土	—	6.5	4.4	底面回転糸切	風化により不明	高台部片
7-9	土師質土器 直唇もしくは环唇上器	1区 淡灰色粘質土	—	3.5	1.7		風化により不明	底部片
7-10	土師質土器 直唇もしくは环唇下器	1区 淡灰色粘質土	—	5.0	1.7		風化により不明	底部片
7-11	土師質土器 直唇もしくは环唇上器	1区 淡灰色粘質土	—	5.6	1.4		風化により不明	底部片
7-12	土師質土器 土鍤	1区 淡灰色粘質土	最大長 2.5	最大幅 1.0	0.5			一部欠損
7-13	土師質土器 土鍤	1区 淡灰色粘質土	最大長 4.2	最大幅 2.0	0.6			完形品
7-14	土師質土器 土鍤	1区 淡灰色粘質土	最大長 4.4	最大幅 2.3	0.8			一部欠損
7-15	磁器 碗、皿類	1区 淡灰色粘質土	—	—	1.8	貫入が見られる		12世紀末 中国 製白磁
7-16	織文土器 深鉢	1区 黑色粘質土	—	—	3.5		(外) ナデ調整	頭部片
7-17	弥生土器 甕	1区 黑色粘質土	—	—	4.5	外側にヘラ括きによる1条の沈線を施す	(外) ハケ調整 (内) ハケ調整の後、ミガキ	口縁部片
7-18	弥生土器 甕	1区 黑色粘質土	—	—	4.0	外側前面最大幅付近に突起を貼付け、横方向の波状文と直線文を施す	(外) ハケ調整の後、ミガキ?	頭部片
7-19	弥生土器 甕	1区 黑色粘質土	—	—	3.5	外側にヘラ括きによる3条の沈線を施す	(外) ハケ調整の後、ミガキ? (内) 風化により不明	頭部片 部に スが付着
7-20	弥生土器 甕	1区 黑色粘質土	—	—	4.0	外側にハケ調整の後、列点文を施す	(外) ハケ調整 (内) ハケ調整	頭部片
7-21	弥生土器 甕	1区 黑色粘質土	—	—	2.0		(外) わざかにミガキ痕が残る (内) 不定方向のミガキ	底部片
8-22	石燃 黒曜石	1区 淡灰色粘質土	最大長 2.2	最大幅 1.8	0.8	凹基無茎縁		一部欠損 重量: 9.1g
9-23	敲石	1区 淡灰色粘質土	最大長 2.2	最大幅 1.8	0.8		叩き痕が残る	重量 530.23g
9-24	磨製石斧	1区 淡灰色粘質土	最大長 5.4	最大幅 3.1	1.8			一部欠損 重量 43.97g
9-25	織文土器 深鉢	1区 淡灰色粘質土	—	—	10.0		(外) 条痕 (内) ナデ調整	頭部片
10-26	弥生土器 甕、甕類	1区 淡灰色粘質土	—	—	6.0		(外) ハケ調整 (内) ハケ調整	頭部片
10-27	織文土器 深鉢	1区 粗砂層	—	—	3.2		(外) 条痕 (内) ナデ調整	頭部片
12-28	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層IV	—	—	6.0	直線文と貝殻縁による羽状文を施す	(外) ヘラミガキ (内) ヘラミガキ	頭部片
12-29	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層IV	—	—	5.2		(外) ハケ調整 (内) ハケ調整	頭部片
12-30	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層IV	25.0	—	1.7	口縁部に刻目を施す	(外) ナデ調整 (内) ナデ調整、ヘラミガキ	口縁部片

探査番号	種別 器種	出土位置	法量(cm)			形態・文様の特徴	箇数	備考
			口径	底径	残存高			
12-31	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層IV	—	7.4	6.5	(外) ハケ調整	底部片 内面に スヌが付着	
12-32	弥生土器 甕・壺類	2区 暗褐色土層IV	—	7.5	4.5	(外) ヘラミガキ (内) ヘラミガキ	底部片	
13-33	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	6.5	磨消端文		
13-34	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	3.0	貼付突起の上と口唇部に刻 目を施す		
13-35	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	3.5	貼付突起の上に刻目を施す		
13-36	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	23.8	—	5.2	貼付突起の上に刻目を施す		
13-37	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	27.4	—	3.7	貼付突起の上と口唇部に刻 目を施す		
13-38	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	30.0	—	3.2	貼付突起の上にわざかに刻 目を施す		
13-39	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	39.8	—	4.5	貼付突起の上にわざかに刻 目を施す		
13-40	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	4.5			
13-41	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	4.8			
13-42	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	5.2			
13-43	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	6.9			
13-44	縄文土器 深鉢	2区 暗褐色土層V~VI	—	6.4	3.9			
14-45	弥生土器 鉢	2区 暗褐色土層V~VI	12.0	—	5.4	(外) 不明 (内) ヘラミガキ		口縁部片 外面 にスヌが付着
14-46	弥生土器 鉢	2区 暗褐色土層V~VI	12.6	—	6.0	口唇部に刻目を施す		
14-47	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	12.8	—	6.8	二枚貝による3条の直線文		
14-48	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	16.0	—	1.6			
14-49	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	35.0	—	2.9	口唇部にハラ書きによる1 条の沈文		
14-50	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	2.7	直線文の下に剥離文を施す。 肩部にわざかに段を持つ		
14-51	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	3.8	貝殻模様による羽状文を施す		
14-52	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	5.2	貝殻模様による2条の直線 文と剥離文を施す		
14-53	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	6.8	上下にハラ書きによる直線 文を施し、その間に貝殻模 様による剥離文を施す。		
14-54	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	5.0	わざかに段を持ち、縱方向 の有輪羽状文を施す。		
14-55	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	5.2	ハラ書きによる3重の重複 文を施す		
14-56	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	6.0	やや不明瞭な段を持ち、3 条の直線文と3重の直線文 を施す		
14-57	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	4.3	貼付突起の上に刻目を施す		
14-58	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	7.6	5.3			
14-59	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	10.0	2.2			
14-60	弥生土器 甕	2区 暗褐色土層V~VI	—	—	2.1	口唇部に刻目を、その下に 2条の直線文を施す		
						(外) ハケ調整		

探査番号	種別	出土位置	法量(cm)			形態・文様の特徴	調整	備考
			口	社	底			
14-61	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	3.2	口部に刻目を、その下に何条かの直線文を施す		口縁部片
14-62	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	17.6	—	5.4	口部に刻目を、その下にヘラ括きによる4条の直線文を施す	(外) ナデ調整 (内) ナデ調整	口縁部片
14-63	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	17.6	—	5.2		(外) ナデ調整、ハケ調整 (内) ナデ調整	口縁部片
14-64	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	18.0	—	3.0	口部に刻目を、その下にヘラ括きの何条かの直線文を施す	(外) ハケ調整 (内) ナデ調整、指頭圧痕	口縁部片
14-65	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	6.6	2条のヘラ括き直線文の間に鏡文を施す	(外) ハケ調整 (内) ナデ調整	銅部片
14-66	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	6.0	ヘラ括きによる2条の直線文を施す	(外) ナデ調整、ハケ調整	銅部片
15-67	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	26.4	—	3.5		(外) ナデ調整、ハケ調整 (内) ナデ調整	口縁部片
15-68	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	18.4	—	4.0	口部に刻目を、その下にヘラ括きの4条の直線文を施す	(外) ヘラミガキ (内) ヘラミガキ、指頭圧痕	口縁部片
15-69	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	22.0	—	9.5		(外) ハケ調整?ナデ調整 (内) ナデ調整、指頭圧痕	口縁部片
15-70	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	21.0	—	3.0	縱方向の羽状文を施す	(外) ナデ調整、ハケ調整	口縁部片
15-71	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	19.0	—	7.0	ヘラ括きによる直線文を施す	(外) ハケ調整、ナデ調整、指頭圧痕 (内) ナデ調整、ハケ調整	口縁部片
15-72	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	23.6	—	7.0	外面と口縁部内面にヘラ括きによる直線文を施す	(外) ハケ調整、ナデ調整、指頭圧痕 (内) ナデ調整	口縁部片
15-73	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	24.8	—	11.5	口部にハケ原体による刻目を、病部にヘラ括きによる直線文を施す	(外) ナデ調整、ハケ調整 (内) ハケ調整	口縁部片
15-74	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	27.0	—	4.0	口部に刻目を施す	(外) ナデ調整、ハケ調整 (内) ヘラミガキ	口縁部片
15-75	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	27.0	—	4.0		(外) ヘラミガキ (内) ヘラミガキ	口縁部片
15-76	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	27.0	—	12.0		(外) ハケ調整 (内) ヘラミガキ	口縁部片
15-77	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	29.4	—	5.0		(外) ナデ調整、ハケ調整 (内) ハケ調整、ナデ調整、指頭圧痕	口縁部片
15-78	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	6.2	6.4		(外) ハケ調整	底部片
15-79	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	7.0	3.5		(外) ハケ調整 (内) ハケ調整、ナデ調整、指頭圧痕	底部片
15-80	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	7.8	4.8		(外) ヘラミガキ (内) 指頭圧痕	底部片 外面に何か擦らされているように見える
15-81	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	9.2	6.5		(外) ハケ調整	底部片
15-82	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	7.6	12.3		(外) ハケ調整 (内) ハケ調整	底部片
16-83	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	3.3	2本の貼付突巻の上に刻目を施す	(外) ナデ調整 (内) ハケ調整	口縁部片
16-84	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	5.9		(外) ナデ調整、ハケ調整 (内) ナデ調整	銅部片
16-85	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	10.0	列点文を施す	(外) ハケ調整 (内) ハケ調整	銅部片
16-86	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	4.3	2段にわたって刻文を施す	(外) ハケ調整 (内) ハケ調整	銅部片
16-87	弥生土器 甕	2区 縫褐色土層V~VI	—	—	7.0	頸部に指頭圧痕文を施す	(外) ハケ調整 (内) ハケ調整	頸部~肩部片
17-88	木製品 漁具	2区 縫褐色土層V~VI	地大長	地大幅	最大厚	穿孔が2つあり		
17-89	木製品 漁具	2区 縫褐色土層V~VI	64.7	9.9	5.1	断面が半月状を呈し、片方は握手状の加工が施されている		
17-90	木製品 漁具	2区 縫褐色土層V~VI	56.0	10.0		先端部に工具による加工痕が見られる		



調査前全景（1区周辺）



調査前全景（2区周辺）

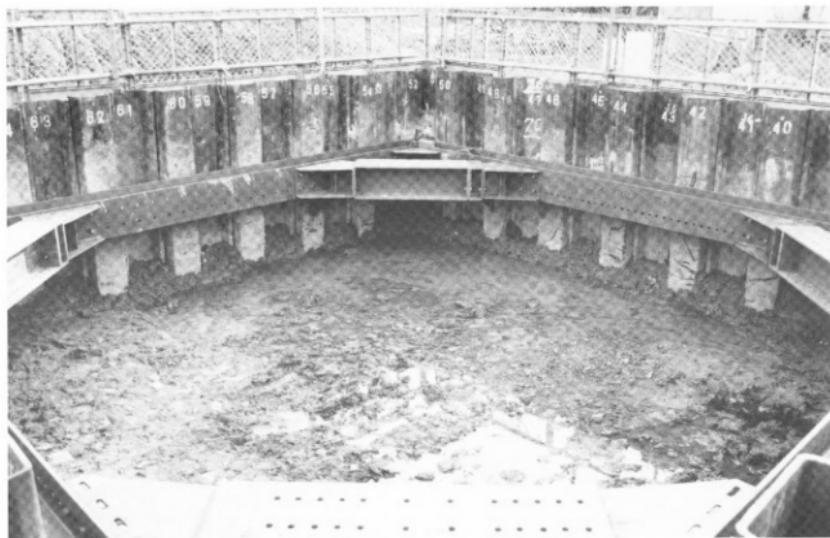
図版 2



1区 調査状況



1区 完掘状況と土層断面

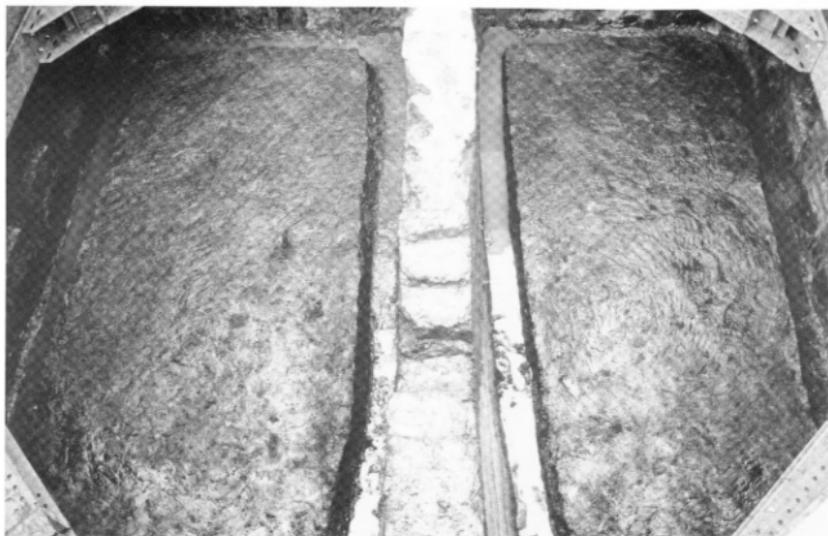


2区 調査状況

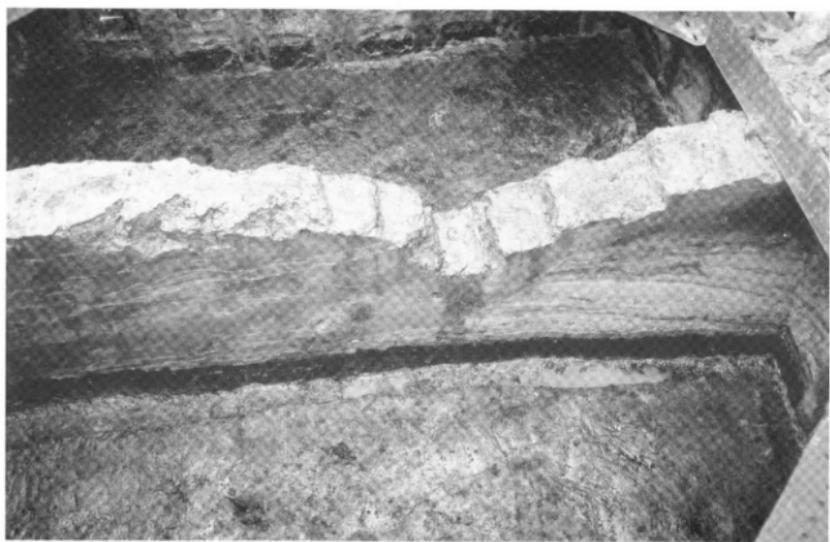


2区 遺物出土状況

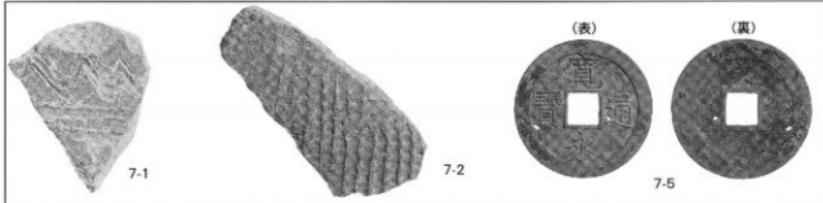
图版 4



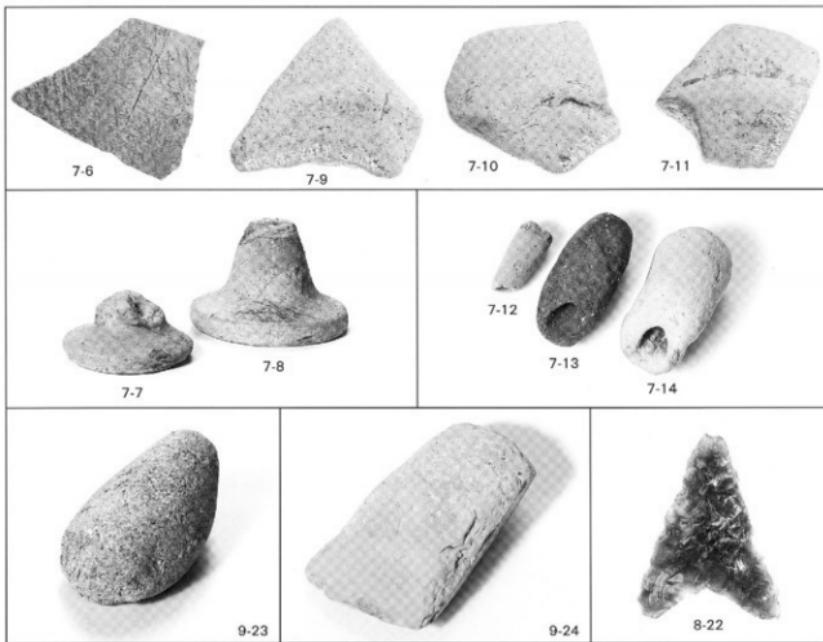
2 区 完掘状况



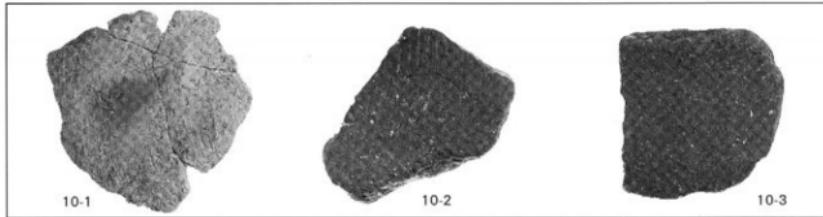
2 区 土层断面



1区 灰褐色粘質土層 出土遺物

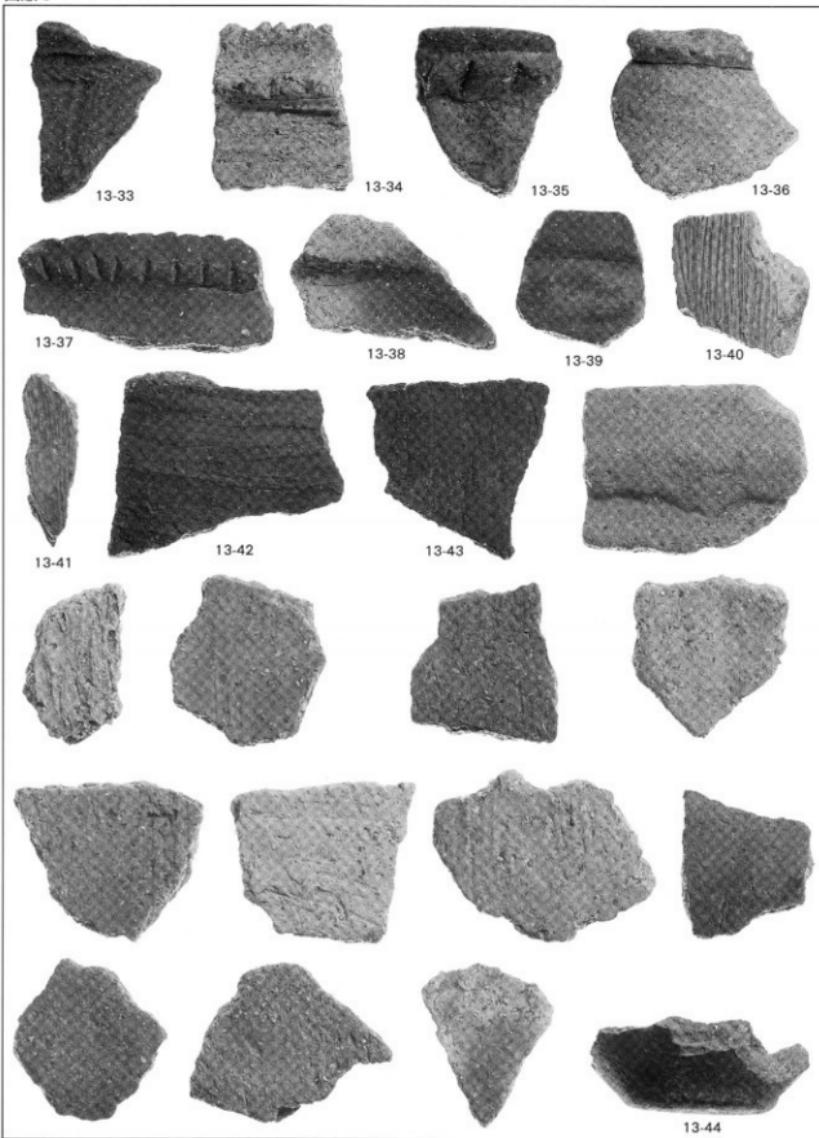


1区 淡褐色粘質土層 出土遺物

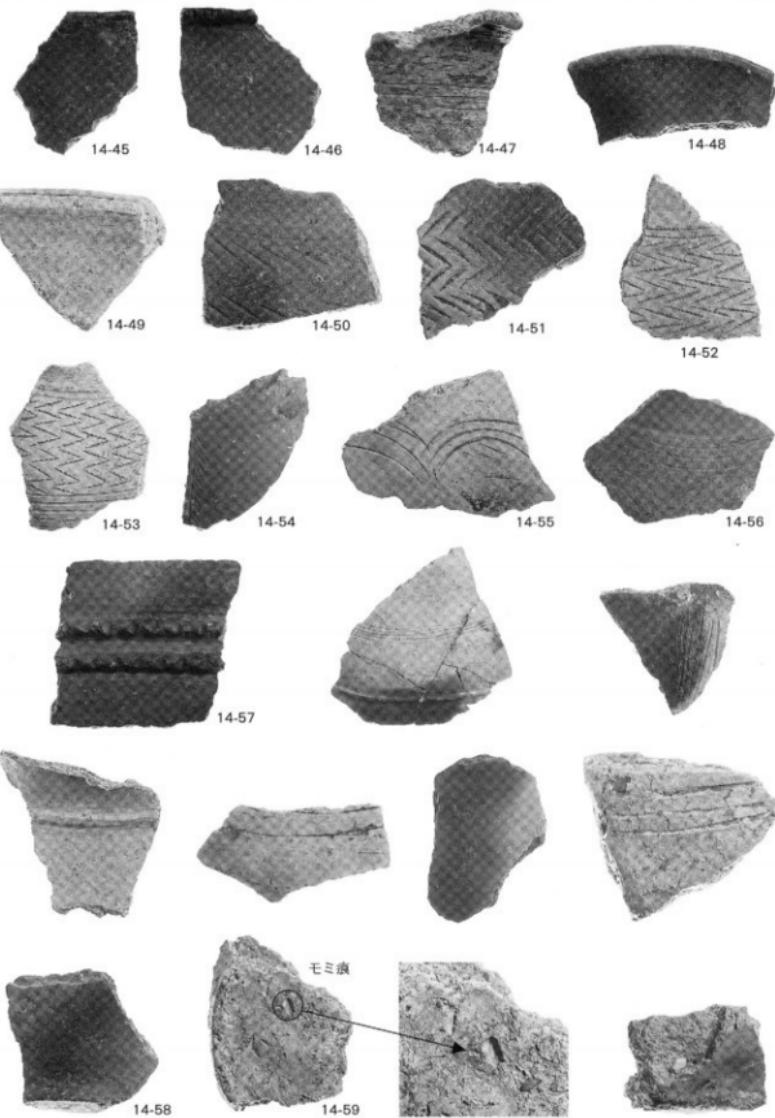


1区 濃褐色粘質土～粗砂層 出土遺物

図版6

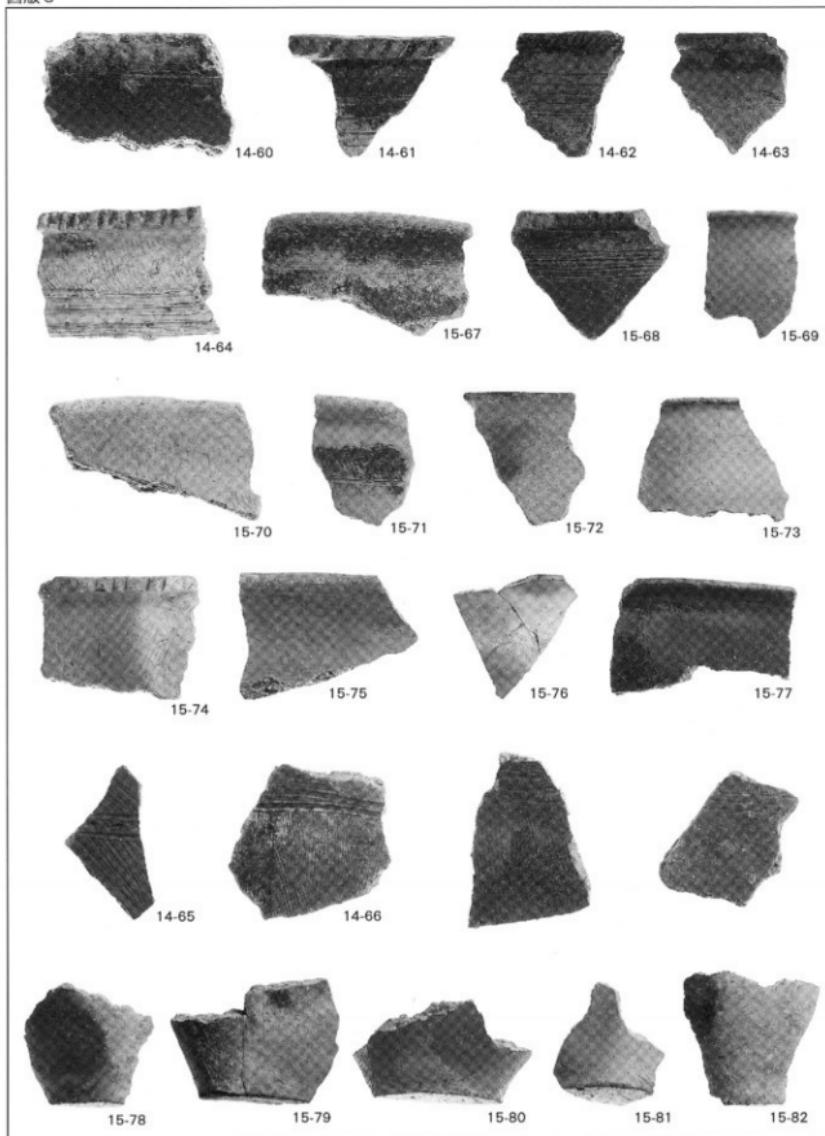


2区 下層遺物包含層 出土遺物 縄文土器



2区 下層遺物包含層 出土遺物 弥生土器(1)

图版8

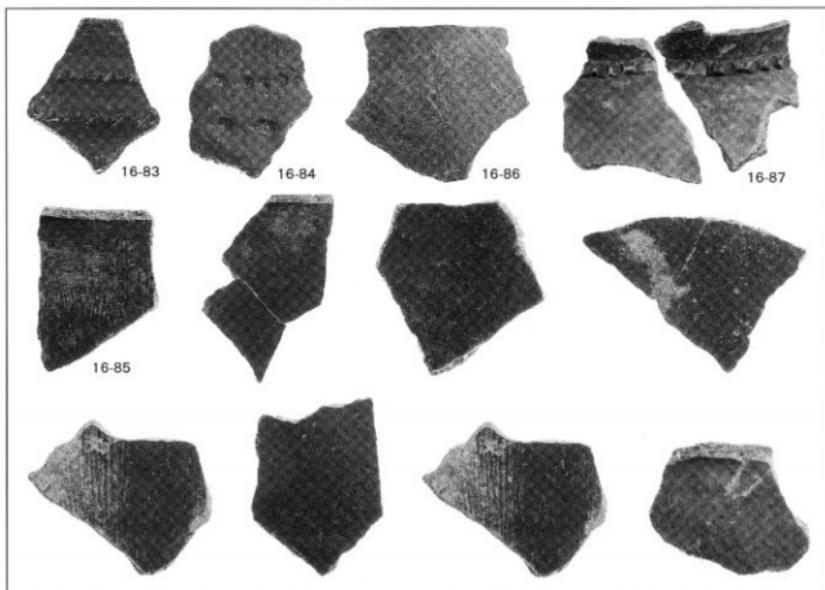


2区 下層遺物包含層 出土遺物 弥生土器(2)

図版 9



2区 上層遺物包含層 出土遺物 弥生土器



2区 下層遺物包含層 出土遺物 弥生土器(3)



2区 上層遺物包含層 出土遺物 木製品



2区 下層遺物包含層 出土遺物 木製品

報告書抄録

ふりがな	いしだいにいせき								
書名	石台II遺跡								
副書名	(都)東津田中央線事業に伴う発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	松江市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第123集								
編著者名	石川 崇 渡辺正巳								
編集機関	松江市教育委員会								
	財団法人松江市教育文化振興事業団								
所在地	島根県松江市末次町86番地 TEL 0852(55)5284								
	島根県松江市島根町加賀1263-1番地 TEL 0852(85)9210								
発行年月日	2009年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
石台II遺跡	島根県 松江市 西津田町	32201	D-1063	35° 27° 09	133° 05° 32	20071225 20080228	180m ²	道路建設	
				35° 27° 08	133° 05° 33	20081020 20081128	40m ²		
所収遺跡名	各種別	主な時代		主な遺構		主な遺跡		特記事項	
石台II遺跡	散布地	縄文時代(後期～晩期)		なし		縄文土器(深鉢)ほか		晩期後半の 突縁文系の 土器が中心	
		弥生時代(前期～中期)		なし		弥生土器(壺・甕) 木製品ほか		前期を中心とする 遺物 包含層	
		中世		なし		脚付皿形もしくは 环形土器ほか		12-13世紀代?の 土器	

松江市文化財調査報告書 第123集

石台Ⅱ遺跡

2009年3月

発行 松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷有限会社